

最優秀作品

『三階の図書館から、街の宝物へ』

平戸市 有安 直子

平戸に嫁いできた十五年前、当時の図書館は昔の北部公民館の三階にありました。こじんまりとしたその空間は、私の小さな癒しの場所でした。妊娠中もよく通いましたが、エレベーターがなく、お腹が大きくなるにつれて三階までの階段がとてもしんどくなりました。

子どもが生まれ、抱っこひもで通う日々が始まりました。一歳を過ぎると、よちよち歩きの小さな足で三階まで階段を登りました。二人目を妊娠した頃には、上の子を連れて大きなお腹で階段を上がるのが大仕事でしたが、それでも図書館へ行く時間だけは欠かせませんでした。本が子供と私の癒しの時間でした。

そして、子どもたちが四歳と二歳になった頃。あの小さな図書館が、今の立派な図書館へと生まれ変わりました。

初めて足を踏み入れた時の感動は、今でも忘れられません。広々とした空間に、明るい光。右手には子どもの絵本コーナーが広がり、読み聞かせのスペース、子供にちょうどいい机とイス。まるで「子どもたちのための夢の部屋」がそこに現れたようでした。

充実した蔵書、様々なニーズに対応したデスクやイス、勉強スペース、遊び心のある木の部屋、絶景が望めるテラスやソファー席、理想を形にしたような図書館がそこにはありました。なにより驚いたのは、本の貸出数に制限がないこと。興味のある本を、心の赴くままに借りられるのです。

今では、子どもは四人。それぞれが自分で選んだ本を抱え、家族でいつも四十冊ほど借りて帰ります。かつて絵本コーナーで指をさして笑っていた長女は、いま中学二年生。お気に入りの勉強スペースでテスト勉強をしています。本を通して育った子どもたちの姿を見るたびに、「あの階段を上った日々」が報われたような気がします。

子供の成長と共に、この図書館で学んだことがたくさんあります。末っ子はまだ三歳。これからもこの図書館で、たくさんの物語と出会い、心を育てていくことでしょう。この図書館は、私たち家族にとって、平戸の中でいちばん大好きな場所です。